

2月15日(金) 講師 亀山郁夫様(東京外国語大学 学長)

「ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』の謎を解く」の概要

(ロシア理解の枠組み)

- ・一昨日モスクワ、ペテルブルクの5日間の旅から帰国した。3月のロシア大統領選の夜の「ロシアの独裁とドストエフスキー」というNHKの番組収録のために滞在。今年は暖冬でほとんど雪をみることができず、それこそ泥だらけのモスクワとペテルブルクであった。その中で世界の高級車と呼ばれているものが泥まみれで走っていた。「泥の中の平等」、社会主義ソ連の時代のある種の記憶を髣髴。オルガルヒと呼ばれる新興財閥が資本主義経済をがっちり握っているが、彼らのメンタリティは30年前から変わっていないのではないか。車は動けばよい、というある種単純で原始的な発想がまだ生きている。
- ・ロシアの独裁というテーマ、すなわちロマノフ朝、20世紀社会主義政権を通じて、なぜ独裁が持続されてきたか、その理由は強大、広大な国家であること。なおかつその中で生きている人々の心がどこかアナーキー性、しかし、野蛮な野獣性というよりは穏やかなもの。直感的には、袴田茂樹氏の言う「砂の社会」なのだろう。しかし、個人という砂のモナド、砂と砂の間に何か粘着的なものがあるというのが、私のロシアイメージ。そして、ロシア滞在中、ドストエフスキーの「神がなければすべてが許される」という一言がしきりに去来するのを感じた。19世紀の詩人フォードル・チュッチェフが、ロシアは頭では理解できない、心で感じるものと言ったが、今回もハートでしかわからないという感覚を、追認する旅であった。
- ・ロシアの人々のメンタリティの枠組みとして、西欧に憧れる人々と、ロシアの大地、固有の価値観を大事にする人々が帯として左から右へ、知識人から最下層の民衆へ縦の帯。ほんの数%の貴族、圧倒的多数の農奴に二分された国家。極めて少数の知識人が文化の担い手であるが、世界の知性を率いるような、桁外れの才能と巨大な個性、例えばトルストイ、ドストエフスキーのみならず、プーシキン、チャイコフスキーを輩出。非常に長い帯の中間地帯がゼロ。中間がなく、真ん中がぼけているが、4つの座標、象限のどこかには入っているはず。これを手がかりにする。

(翻訳の姿勢)

- ・2002年大仏次郎賞を頂いた「磔のロシア」という本を書いたが、三校になってもかなり赤があった。何でこんなに赤が多いのか、自分なりに自問した。適切な言葉が出てこない人間なんだ、という発見。書くという段階になると日本語が出てこない。初校でようやく背筋がスッと伸びて真剣勝負の言葉が出てくる感じ。本当に表現し

たい内容と文体の一对一の結びつきのレベルが、四校くらいでようやく8割5分に達する。私は段階を経ないとだめ。他の研究者、翻訳者はそこまで粘らない、自分の持っている内容を80~90%伝えようとする意思を持たない。逆に言うと内容が無いということ。言葉で表現できないこと、無意識で考えていることがある。未分化のものをいかに精緻に表現するか、文学者、作家はその未分化の何かを持っていないと、あるいは育てないといけない。ドストエフスキーは、未分化を固まりとして膨大に持っていた。彼は「罪と罰」の最終章から、「カラマーゾフの兄弟」に至るまで口述筆記である。奥さんが速記者であった。「罪と罰」以前と以降では言葉の出方が全く異なっている。語りは、非常にダイナミックに流れる。原稿用紙を削るようなものとは違う。カラマーゾフはほとんど90%が会話であるが、巨大な叙事詩のような世界として頭に定着する。翻訳は語りを実感させる、聞いてもらう感じで仕立てればよいという発想で訳語を磨き上げていった。書くことによって現れない何か、すなわち語るにより別の脳が活性化し、無意識の部分が出てくる。それがカラマーゾフの魅力。ドストエフスキーが口述して、奥さんが筆記、清書して、それにドストエフスキーが赤字を入れる。いわばワープロ感覚ではなかったか。ワープロは、早く打てば打つほど無意識の部分を言語化できる。若い人のワープロ、パソコンによる文章には、身体的、皮膚感覚が顕著である。文字で書いては絶対できない。翻訳は身体的なものに変えていかないとはいけない。これまでの訳者はガリガリ書いていた。ワープロによる訳文は私が初めてだと言える。ドストエフスキーの身体感覚をストレートに言語化できる仕組みを借りて出来たということかも知れない。

（「カラマーゾフの兄弟」の謎）

- 解いても解いても、謎がまた出てくる。「カラマーゾフ」は父親殺しの物語である。父親は好色、強欲で、破滅的な人間だが、道化的でもある。ある日殺される。3人の兄弟のうち誰が殺したか、実際は料理番のスメルジャコフが殺した。彼が父親の子だとすると、兄弟は4人いることになる。彼は下男であり、差別を受けていた。嫡子ではないため財産を引き継ぐ権利はない。
- 「カラマーゾフの兄弟」を何歳で読めばよいかという質問が何度も受けた。ひとそれぞれ違う。父親の死を経験した人が、それもおそらく18歳以降、遺産相続をどうするかという問題に直面した人が最初に読む資格者。そのとき、兄弟の神話的な関係を失う。遺産をいかに分け合うかが家族の崩壊の始まり。長男のドミートリは12万ルーブルのうち、3千ルーブルだけ必要であった。愛し始めたグルシェニカという女性と新たな生活を始めるための最小限の金額。アリューシャは修道院で生活しているため必要ない。誰のものになるか、次男のイワンがどう考えているか、わからない。「カラマーゾフの兄弟」の中心テーマはお金だと思う。

ドストエフスキーが現代的な作家としてここまで生き延びているのは、お金を取り扱っているからだ。お金は、人々が翻弄される残酷な力、運命のメタファーとも言える。それにより、登場人物全員が引き裂かれている、その引き裂かれ方が尋常ではない。

- イワンは、最も優れた知性。彼が町にモスクワから帰ってきた理由が父親はわからない。財産を狙っているかと疑い、一方でドミートリと争っているグルーシェニカのために財産全部つぎ込んでもよいと考えている。財産を巡る無意識のドラマが、イワンの物語の基調をなす。なぜ、ドストエフスキーは生涯の最後になって父親殺しをテーマにし、そしてイワンがスメルジャコフを唆して父親を殺させるという、手のこんだ物語にしたのか、これがまず謎。
- 私はドストエフスキー研究を、50代になって開始した。ドストエフスキー研究者は10代から勉強しているが、50を過ぎて1冊の本も書けずに終わっていく。彼らは、頭が固まっており、紋切り型になるため、勢い外の研究に頼るが、オリジナリティがない。私はソ連・スターリン体制下の前衛芸術を研究してきた。芸術家、作家が権力の恐ろしいテロルに怯えながら、スターリンを称えつつも、自分の文学的な名声を将来担保するためにいかに創作するか、まさにスターリン体制との戦いであった。皇帝権力の下で怯えているドストエフスキーは、皇帝を賛美してきたが、本当に賛美し切っていたのか、実は二枚舌で生きていたはず。ドストエフスキー研究者は、歴史と人間、権力と人間の無意識にいたる戦いが見えない。ドストエフスキーは20代の終わりに社会主義に関わり、皇帝はなくてもよいというところまで行き、そして、捕らえられ死刑宣告を受け、執行の直前で恩赦を受けた。転向してもどこかで社会主義を信じている。もう一つの自我が生きてゆくためには、自分の内心を隠す必要があり、過剰なくらいの皇帝権力の賛美が出てくるが、二枚舌の構造が存在するはず。基本的にドストエフスキーの晩年は右派であるが、皇帝権力を崇拜し、ロシア正教によって国民が統合されるべきと公言。これは85%。しかし15%は違う。ドストエフスキーの没後2ヶ月後にアレクサンドル2世が殺される。彼は7回のテロル、暗殺未遂に遭っている。ロシア正教では死刑制度はないが、皇帝一族の命を狙ったものだけ死刑が適用され、そして多くの場合最後の瞬間に恩赦がある。ドストエフスキーもそこまで行った。
- ドストエフスキーは、農奴による父親殺害を18歳で経験した。その時彼はペテルブルクにいた。28歳の時、ロシアの民衆の父たる皇帝の死を願う。28歳の事件に関する経験、考えは、明らかになっているが、18歳の経験は謎。ほとんど何も語っていない。いきなり58歳になって「カラマーゾフ」で真実を解き明かす。
- イワンがスメルジャコフを唆して殺した。スメルジャコフは、「いやな臭いを発する男」という意味。母親は町を放浪する女、スメルジャーシチャヤ、すなわち「いやな臭いを発する女」というあだ名。ロシアでは聖なる愚者として扱われる神が

かり。その生まれた子がスメルジャコフ。スメルドには悪臭という意味のほかに、差別語的に農奴の意味がある。18歳のとき経験した、農奴が父親を殺した構造と重なってくる。イワンは、スメルジャコフが父親を殺すとき、町から意識的に離れる。スメルジャコフが殺すという予感を持っていた。その構図もペテルブルクにいたという構図と似ている。19歳のドストエフスキーが農奴を唆した、そんなことは絶対ありえない。しかし、心の中では、農奴を唆して殺したというドラマとして経験したに違いない。

- 父親はとんでもない男で、ドストエフスキーは嫌悪していた。しかし、ドストエフスキーのお金の使い方は異常、内部に潜んでいる父親の最も悪い部分を自分も共有している自覚から来る父親の死の願望。あのようなドラマの形式として展開された。イワンは実際やれと一言も言っていない。そこが問題。最終的に自分が唆し殺したという認識に向かう。無意識のうちに父親が殺されると予感しつつも、手を差し伸べず、放置したまま。そのときの心理状態はあいまいで、父親の死を願望しているという見極めがない。実際にスメルジャコフに会う過程のなかで、自分が唆し、殺したという認識。どのような形で唆したのか？ 「神がいなければ、すべては許される」の一言。神の不在がいかにも恐ろしい混沌をもたらすかは、直感でドストエフスキーにはわかる。ロシアには神がないのではないか、ロシアのみならず神はいないのではないか。神がいなければ、誰が裁くのか。スメルジャコフは、イワンからその言葉を聞いて狂喜する。お前は父親を殺せと唆しを受けたと考える。スメルジャコフは悲惨な男。小さいころから猫を縛り首にして葬式をやるのが好きで、下男のグレゴリーから、どやしつけられ、世間をはずにしか見ることができない。やがて癲癇の発作、異常な潔癖症が現れる。針を含んだパンを犬に与えて、苦しむ姿を喜ぶサディストである自分をどう見ていたか。彼の自己像は？ 神の存在をどこかで意識していれば、罪の意識が生まれるが、神がなければ その行為を単純に喜ぶという結果しか残らない。スメルジャコフは、どこかで自分の救い難い性向を意識していた。しかし、イワンの一言ですべてが許される、すべての行為が許される、その延長で人を、父親を殺しても許される、と考える。「神がいなければ」という仮定によって唆しが成り立つ。イワンが神に代わる存在として意識される。イワン＝神の意志を代行する、それによって神と結ばれる。ではイワンは何を願望しているか、それは父親の死、遺産であると考え。愛するイワン＝神に8万ルーブル渡すことができる。その計算がイワンの中にあると読む。その読み方、妄執に、スメルジャコフのプリミティブで稚拙な悲劇がある。
- スメルジャコフは本当にフォードルの子か？ これは謎。2つ仮説がある。スメルジャコフは自分の父親であると思っているが、フォードルは思っていない。確かにどこにも書いていない。ドストエフスキーはわざと隠している。子でなければ全く別の論が生じる。

(なぜベストセラーになったか)

- 読みやすいというのとは関係ないだろう。メディアを預かっている人々の良心、古典への信頼を持っている人が、新訳が出たということで好奇心から始まったハレーションではないか。ネットワークが繋がったということ。読みやすいというのは付属的なもの。ただ、だれにも理解できるカラマーズフをめざし、読みやすい翻訳を作ろうとした。間違いを犯すまいと、すべてを訳そうとすると無理である。原文を翻訳する姿勢は、水を上からみると、今までの翻訳は、本質に達するまで濁っている。私の翻訳は底の浅さも見える。これまでは翻訳に刺激されてイメージネーションで倍加されていた。底を想像しながら翻訳を読むという考え方、幻想を抱きたい読者の気持ちの問題。現代では世界を把握したいという意味においてはわかりやすいことも決して貶められるべき点ではないのではないか。

(以上)